

母親の定位家族体験と育児不安

—母親の育児ネットワークを視野に入れて—

ナカタニ ナ ツ コ
中谷 奈津子*

目的 本研究では、乳幼児を持つ母親の定位家族体験の認知および現在の育児ネットワークと、育児不安との関連について検討した。

方法 三重県鳥羽市内全域の保育所16カ所、幼稚園1カ所に通う子どもを持つ770世帯の母親を対象とした。鳥羽市社会福祉事務所の協力を得て、2004年9月中旬から下旬にかけて、各保育所または幼稚園に調査票を配布し、回収した（委託留置調査法）。対象となった770世帯のうち431世帯の票を回収した（回収率56.0%）。そのうち無効票を除く421票を分析の対象とした。

結果 育児不安得点について因子分析を行ったところ、「生活疲労」因子、「育児不安」因子、「充実感欠如」因子の3つが抽出された。また母親の小学生の頃の定位家族体験12項目について対応分析を行い、因子軸第1軸～3軸を抽出した。第1軸はきょうだいやおじ・おば等による厳格な養育⇄祖父母による受容的でモデル的な養育、第2軸は祖父母中心の養育⇄父母によるケアとモデル的な養育、第3軸は祖父によるケア中心の養育⇄祖母によるケアとモデル的な養育と表わされた。分析の結果「生活疲労」因子については、世話ネットワーク（リフレッシュ）を持つ母親ほど、生活疲労の因子得点が高く、母親の収入が200～300万円未満の時にも生活疲労が高いことが分かった。「育児不安」因子については、助言ネットワーク、世話ネットワーク（自分の病気時）があるほど育児不安は低い傾向にあり、世話ネットワーク（リフレッシュ）が多いほど育児不安が高くなる傾向にあった。「充実感欠如」因子については、祖父によるケア中心の養育を受けてきた母親は、充実感欠如の得点が高く、祖母中心のケアとモデル的な養育を受けてきた母親は、その得点が低い傾向にあった。

結論 育児ネットワークが有効に働いていたのは、「育児不安」因子のみであり、「生活疲労」因子については、世話ネットワーク（リフレッシュ）が負の相関を示すのみであった。「充実感欠如」因子においては、育児ネットワークが有効な支援策として機能しておらず、むしろ母親の定位家族体験の認知に影響されていることが明らかとなった。

キーワード 定位家族体験、育児不安、育児ネットワーク、母親

I はじめに

1970年代後半より、育児不安研究が盛んに行なわれるようになった¹⁾²⁾。中でも牧野は、母親自身のネットワークの広さ、育児に関する悩みや不満を気軽に話せる人がいること、母親が

子どもから離れる時間を持つこと、父親の育児協力等が育児不安に関連するという見解を示し³⁾、その後の研究にも大きな影響を及ぼしている。

一方、母親の定位家族体験の認知と育児不安に関する研究も近年、みられるようになってきている。川崎、海原、小坂らは、母親が子どもの頃、肯定的に育てられたと感じている場合に

*中京女子大学人文学部准教授

は、現在の育児不安が低い傾向にあり、母親の定位家族体験の認知と育児不安は関連していることを指摘している⁴⁾。また小木曾は、就学前の子どもを持つ母親を対象として、被養育体験と現在の育児負担感との関連をみた。その結果、操縦、侵入、過剰接触など過保護な被養育体験の得点の高い母親は、現在の育児負担感も高い傾向にあることを明らかにしている⁵⁾。これらのことから、子どもの頃の定位家族体験の認知は、その後の育児にも何らかの影響を及ぼすことが示唆される。換言すれば、母親の定位家族体験が貧しければ、その後の育児に、何らかの影を落とす可能性があることを意味している。親自身が家族とのつながりが薄いなどの貧しい定位家族体験を持つと、それは次の世代への虐待のリスクにもなりうるとの指摘もある⁶⁾。しかし、これまでの研究では、「親（養育者）は、私のことを常に気にかけてくれた」「両親の様々な態度や行動」など、定位家族の対象者がその「親」に限定される傾向があり、「誰による」「どのような」といった養育者や役割行動の多様性に乏しいという問題点が残る。「家族全体」のダイナミクスを考えるのなら、定位家族における「親」のみに焦点を当てるのではなく、より広い範囲で家族の構成員を視野に入れることの方が、母子密着が指摘される昨今の社

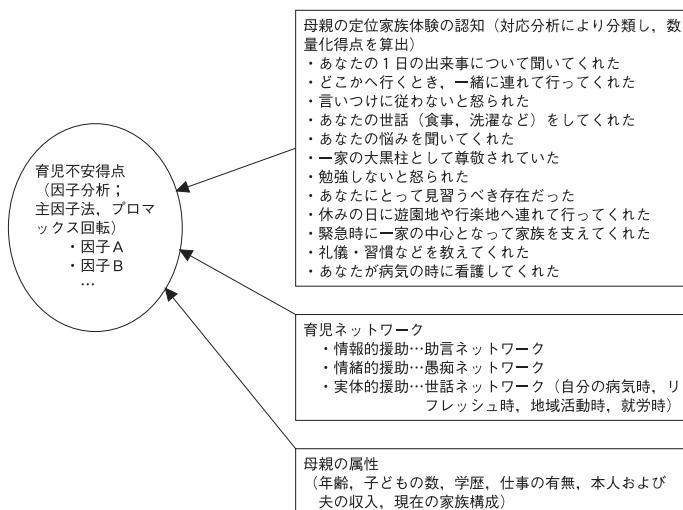
会状況の中では、意味があるものと思われる。

さらに、これまで蓄積されてきた育児不安研究においては、育児不安を軽減する機能を持つものとして「育児ネットワーク」が着目されてきたところである。それらに共通する知見として、父親の育児援助の重要性があげられる。また近所の人、妻方の親戚や実母、夫方の親、保育所や幼稚園における知人や保育者などが、母親の育児不安を軽減していることも明らかとなっている。つまり、母親の育児の「今」を支えるネットワークが、育児不安の軽減に有効に機能しているのである⁷⁾⁻¹⁰⁾。

では、母親の「過去」である定位家族体験の認知と、「現在」ある育児ネットワークは、どのように絡み合い、母親の育児に影響を及ぼしているのだろうか。本研究では、乳幼児を持つ母親の定位家族体験の認知に着目し、幼い頃に「誰が」「どのような役割」を担ってくれていたかを把握し、母親の定位家族体験の認知および現在の育児ネットワークと、育児不安との関連について検討する。母親の定位家族における養育者がその後、育児ネットワークとして機能する可能性が高いことを予測し、本論では、比較的3世代同居が多く人口流入が少なくと予想される鳥羽市を調査地として選出した。

Ⅱ 研究方法

図1 分析の枠組み



(1) 分析の枠組み（図1）

本論では、育児不安項目について因子分析を行い、各因子得点を定量データに変換し従属変数として使用した。また定位家族における養育の担い手とその役割の認知について、対応分析を用いてパターン分類を行い、内的整合性の高い因子軸について対象者に関する数量化得点を算出した。加えて各育児ネットワーク得点と母親の属性を独立変数として、一般化線形モデルを用いて検討する。一般化線形モデルを用いる理由として

は、独立変数に定性データ、定量データが混在しているためである。分析に当たっては、統計ソフト SAS9.1を使用した。

(2) 使用した変数

主な質問項目は、母親の属性として、本人の年齢、子どもの数、学歴、仕事の有無、本人および夫の収入、現在の家族構成、定位家族における同居の構成員（父、母、祖父、祖母、きょうだい、その他）をたずねた。

また母親の定位家族体験として、冬木・本村¹¹⁾を参考に「あなたが小学生の頃、次の役割は、ご家族のうち、どなたが担っていましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください」という問いを立て、「あなたの1日の出来事について聞いてくれた」「どこかへ行くとき、一緒に連れて行ってくれた」など12項目を設定した（図1）。役割を担う人物としては、同居の父、母、祖父、祖母、その他（きょうだいを含む）としている。

母親の育児ネットワークは、中谷¹²⁾の育児ネットワーク4項目と、地域活動等の時の子の世話、自分の病気時の子の世話を加え6項目設定し、その援助者について複数回答でたずねた。「次のような時にあなたは誰に助けてもらいましたか」とたずね、情報的育児ネットワークとして「子育てのやり方や子どもの健康管理に助言を求めた人（助言ネットワーク）」、情緒的育児ネットワークとして「子育ての愚痴を聞いてもらった人（愚痴ネットワーク）」、実体的育児ネットワークとして「自分が病気の時に、子どもの世話を頼んだ人（世話ネットワーク（自分の病気時））」、「自分がリフレッシュに出かけるために、子どもの世話を頼んだ人（世話ネットワーク（リフレッシュ時））」、「地域活動や団体活動などに出かけるために子どもの世話を頼んだ人（世話ネットワーク（地域活動時））」、「働きに出ている時、子どもの世話を頼んだ人（世話ネットワーク（就労時））」とした。援助者1人を1点と数え、それぞれのネットワーク得点を算出した。援助者としては、夫、夫の親、夫方の親戚、自分の親、自分方の親戚、近所の人、

表1 母親の属性

(単位 人, ()内%)

基本的属性	人数
本人の年齢	
29歳以下	86 (20.4)
30～34歳	147 (34.9)
35～39	122 (29.0)
40歳以上	61 (14.5)
無記入	5 (1.2)
子どもの数	
1人	63 (15.0)
2人	209 (49.6)
3人	117 (27.8)
4～5人	12 (2.9)
無記入	20 (4.8)
学歴	
中学校	12 (2.9)
高校	241 (57.2)
短大・高専	96 (22.8)
大学以上	28 (6.7)
その他	19 (4.5)
無記入	25 (5.9)
仕事の有無	
専業主婦	102 (24.2)
仕事あり	273 (64.8)
無記入	46 (10.9)
本人の収入	
なし	12 (2.9)
～103万円未満	115 (27.3)
～200万円未満	45 (10.7)
～300万円未満	26 (6.2)
～400万円未満	15 (3.6)
400万以上	14 (3.3)
無記入	194 (46.0)
夫の収入	
～103万円未満	10 (2.4)
～200万円未満	15 (3.6)
～300万円未満	46 (10.9)
～400万円未満	57 (13.5)
～500万円未満	38 (9.0)
～600万円未満	19 (4.5)
～700万円未満	11 (2.6)
700万円以上	14 (3.4)
無記入	211 (50.1)
現在の家族構成	
夫方同居	166 (39.4)
妻方同居	49 (11.6)
隣居家族	91 (21.6)
近居家族	85 (20.2)
孤立家族	20 (4.8)
いない	3 (0.7)
無記入	7 (1.7)
本人の定位家族における同居の構成員	
父	395 (93.8)
母	405 (96.2)
祖父	135 (32.1)
祖母	206 (48.9)
きょうだい	385 (91.4)
その他	29 (6.9)

友人、保育所などの専門機関の人、ベビーシッターや一時預かりの託児所、職場の人、その他とした。

育児不安については、牧野³⁾の育児不安尺度から10項目を抽出し、「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「まったくない」の4段階で

回答を得た。それぞれに0～3点を与え育児不安得点とした。

(3) 調査の概要

本研究で用いたデータは、三重県鳥羽市内全域の保育所16カ所、幼稚園1カ所に通う子どもを持つ770世帯の母親である。鳥羽市社会福祉事務所の協力を得て、2004年9月中旬から下旬にかけて、各保育所または幼稚園に調査票を配布し、回収した（委託留置調査法）。対象となった770世帯のうち431世帯の票を回収した（回収率56.0%）。そのうち無効票を除く421票を分析の対象とした。

表2 育児不安項目の因子間相関行列（主因子法、プロマックス回転）

	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	1.00	0.45	0.39
第2因子	0.45	1.00	0.48
第3因子	0.39	0.48	1.00

表3 育児不安項目の因子構造（主因子法、プロマックス回転）

	第1因子 生活 疲労	第2因子 育児 不安	第3因子 充実感 欠如
朝目覚めがさわやか（でない）	0.66	0.22	0.13
生活の中にゆとりを感じ（ない）	0.66	0.33	0.30
毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.49	0.37	0.60
子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う	0.51	0.49	0.63
考えごとがおっくうでいやになる	0.36	0.50	0.31
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	0.30	0.54	0.29
自分は子どもをうまく育てていると思（わない）	0.27	0.42	0.08
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなる	0.10	0.59	0.26
自分1人で子どもを育てているという圧迫感を感じる	0.31	0.43	0.68
子どもを預けて外出するのは心配でしかたがない	-0.06	0.02	0.44
因子寄与	0.95	0.79	0.92

注 この因子寄与は、他の因子の影響を取り除いたもの

(4) 調査対象者の属性（表1）

調査対象者の属性については、母親の年齢は30歳代前半が最も多く、父親方同居が39.4%を占める（全国平均ではその他の親族世帯は12.1%（2005年度国勢調査報告））。また母親が就労する割合も高く、64.8%が何らかの仕事を持っていた。さらに母親の定位家族における同居の構成員も、祖父（32.1%）、祖母（48.9%）と、3世代同居の多い地域であることがわかる。

III 結 果

(1) 育児不安得点の因子分析

育児不安得点10項目について因子分析を行ったところ、3因子が抽出された（表2、3）。各因子間には、0.4前後の相関関係が認められた。第1因子は「朝、目覚めがさわやか（でない）」「生活の中にゆとりを感じ（ない）」などという項目に共通して含まれる因子であり、「生活疲労」因子と解釈した。第2因子は「考えごとがおっくうでいやになる」「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」「自分は子どもをうまく育てていると思（わない）」「子どものこ

とで、どうしたらよいかわからなくなる」などという項目に共通して含まれる因子であり、「育児不安」因子と解釈した。第3因子は「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」「子どもを育てるために我慢ばかりしている」「自分1人で子どもを育てているという圧迫感を感じる」などという項目に共通する因子であり、「充実感欠如」因子と解釈した。

(2) 母親の定位家族体験の認知について

母親の小学生の頃の定位家族体験12項目について、対応分析を行った。その結果、抽出された因子軸の中から、特異値が0.3以上であり、かつ因子軸についての説明が可能な第1軸～3軸までを取り上げた（表4）。また各項目に付与された数量化得点も併せて示す。

因子軸として抽出された第1軸は、その関連するカテゴリーから、きょうだいやおじ・おば等による厳格な養育⇄祖父母による受容的でモデル的な養育と表わされる。この因子軸は、母親自身が子どもの頃、父母以外による養育がなされていたと認知し、かつ、その養育が厳格的であったか受容的かつモデル的であったかとい

表4 因子軸別カテゴリーの内容と数値化得点

第1軸（特異値0.56 累積%12.4）			
きょうだい・おじ・おばによる厳格な養育（＋）		⇔	祖父母による受容的でモデル的な養育（－）
緊急時に一家の中心となって家族を支えた（その他）	+6.53	悩みを聞く（祖父）	-0.40
勉強しないと怒られた（その他）	+5.21	見習うべき存在だった（祖父）	-0.37
一家の大黒柱として尊敬（その他）	+4.35	悩みを聞く（祖母）	-0.34
言いつけに従わないと怒られた（その他）	+4.16	見習うべき存在だった（祖母）	-0.33
病気の時の看護（その他）	+4.02	悩みを聞く（母）	-0.31
第2軸（特異値0.50 累積%22.4）			
祖父母中心の養育（＋）		⇔	父母によるケアとモデル的な養育（－）
勉強しないと怒られた（祖父）	+2.40	一家の大黒柱として尊敬（その他）	-0.46
病気の時の看護（祖父）	+1.72	遊園地や行楽地に連れて行ってくれた（母）	-0.32
緊急時に一家の中心（祖母）	+1.69	見習うべき存在だった（父）	-0.31
勉強しないと怒られた（祖母）	+1.58	世話をしてくれた（父）	-0.30
1日の出来事を聞いてくれた（祖父）	+1.53	病気の時の看護（父）	-0.30
第3軸（特異値0.34 累積%27.0）			
祖父によるケア中心の養育（＋）		⇔	祖母によるケアとモデル的な養育（－）
病気の時の看護（祖父）	+2.47	緊急時に一家の中心となって家族を支えた（祖母）	-0.80
勉強しないと怒られた（祖父）	+2.45	見習うべき存在だった（祖母）	-0.78
悩みを聞く（祖父）	+2.00	悩みを聞く（祖母）	-0.76
世話をしてくれた（祖父）	+1.93	一家の大黒柱として尊敬（その他）	-0.69
緊急時に一家の中心となって家族を支えた（その他）	+1.82	病気の時の看護（祖母）	-0.65

注（ ）内は養育の担い手

う養育役割についての認知を表している。

第2軸は、祖父母中心の養育⇔父母によるケアとモデル的な養育と表される。この因子軸は、主たる養育の担い手が祖父母であったか、父母であったかという特徴を示し、かつ父母による養育の場合は、ケア役割やモデル的な役割を担う傾向が強かったと認知されていることを示している。

第3軸は、祖父によるケア中心の養育⇔祖母

によるケアとモデル的な養育と表すことができる。この因子軸は、主たる養育の担い手が父母以外であり、かつ祖父、祖母であったかを示している。その養育態度については、祖父についてはケア役割が中心で、祖母についてはケアとモデル的役割が担われていたと認知されているものである。

表5 一般化線形モデルによる育児不安（生活疲労因子）

第1因子（生活疲労因子）		
独立変数	自由度	χ^2 値
第1軸	1	0.00
第2軸	1	0.20
第3軸	1	1.70
助言ネットワーク	1	0.45
愚痴ネットワーク	1	2.21
世話ネットワーク(自分の病気時)	1	2.17
世話ネットワーク(リフレッシュ時)	1	7.41**
世話ネットワーク(地域活動時)	1	0.56
世話ネットワーク(就労時)	1	0.50
本人の年齢	3	4.23
子どもの数	3	6.74†
学歴	4	2.87
仕事の有無	1	0.29
本人の収入	6	11.31†
夫の収入	8	10.26
現在の家族構成	4	1.21

注 † $p < 0.1$, ** $p < 0.01$

表6 生活疲労因子における独立変数の推定値

独立変数	自由度	推定値	χ^2 値
世話ネットワーク(リフレッシュ時)	1	0.16	7.50**
子どもの数			
1人	1	-0.36	1.08
2人	1	0.01	0.00
3人	1	0.05	0.02
4人以上	0	0.00	—
本人の収入			
なし	1	-0.16	0.13
～103万未満	1	-0.10	0.22
～200万未満	1	0.32	1.67
～300万未満	1	0.52	2.96†
～400万未満	1	0.30	0.84
400万円以上	1	0.10	0.08
無回答	0	0.00	—

注 † $p < 0.1$, ** $p < 0.01$

(3) 母親の定位家族体験の認知、育児ネットワーク、属性と育児不安との関連

育児不安得点の因子分析によって得られた各因子得点を従属変数、母親の定位家族体験の認知に関する各軸の数量化得点、育児ネットワーク得点、母親の属性を独立変数として一般化線形モデルによる分析を行った。まずこのモデル全体の適合度をみたところ、自由度253、尺度化 PearsonX2 値が292.0となり、値／自由度は1.15となった。値／自由度が1に近ければ、モデル全体の説明力があると判断されるため、本分析のモデルは採択されるとみなされた。

表7 一般化線形モデルによる育児不安（育児不安因子）

第2因子（育児不安因子）		
独立変数	自由度	χ^2 値
第1軸	1	0.23
第2軸	1	2.32
第3軸	1	0.36
助言ネットワーク	1	6.33*
愚痴ネットワーク	1	2.60
世話ネットワーク（自分の病気時）	1	4.74*
世話ネットワーク（リフレッシュ時）	1	4.53*
世話ネットワーク（地域活動時）	1	0.77
世話ネットワーク（就労時）	1	1.26
本人の年齢	3	4.09
子どもの数	3	2.03
学歴	4	3.19
仕事の有無	1	0.12
本人の収入	6	2.54
夫の収入	8	2.01
現在の家族構成	4	3.40

注 * $p < 0.05$

表9 一般化線形モデルによる育児不安（充実感欠如因子）

第3因子（充実感欠如因子）		
独立変数	自由度	χ^2 値
第1軸	1	0.21
第2軸	1	0.48
第3軸	1	3.70†
助言ネットワーク	1	1.70
愚痴ネットワーク	1	0.10
世話ネットワーク（自分の病気時）	1	2.36
世話ネットワーク（リフレッシュ時）	1	0.77
世話ネットワーク（地域活動時）	1	0.39
世話ネットワーク（就労時）	1	0.60
本人の年齢	3	3.99
子どもの数	3	7.65†
学歴	4	0.71
仕事の有無	1	1.16
本人の収入	6	1.50
夫の収入	8	4.52
現在の家族構成	4	2.56

注 † $p < 0.1$

各因子得点における結果は表5～10に示す。分析の結果、第1因子「生活疲労」について、世話ネットワーク（リフレッシュ時）において有意差が、子どもの数、母親の収入において有意傾向がみられた。世話ネットワーク（リフレッシュ時）を持つ母親ほど、生活疲労の因子得点が高く、母親の収入が200～300万円未満の時にも生活疲労が高いことがわかった。子どもの数については変数内のカテゴリー同士での比較において、有意差は認められなかった。

第2因子「育児不安」については、助言ネットワーク、世話ネットワーク（自分の病気時）、世話ネットワーク（リフレッシュ時）において有意差が認められた。助言ネットワーク、世話ネットワーク（自分の病気時）においては、ネットワークがあるほど育児不安が低い傾向にあった。一方、世話ネットワーク（リフレッシュ時）において、ネットワークが多いほど育児不安が高くなる傾向にあった。

第3因子「充実感欠如」では、母親の定位家族体験の認知に関する第3軸祖父によるケア中心の養育⇔祖母によるケアとモデル的な養育における数量化得点と、子どもの数において有意傾向が認められた。祖父によるケア中心の養育を受けてきた母親は、充実感欠如の得点が高く、祖母中心のケアとモデル的な養育を受けてきた母親では、その得点が低い傾向にあった。子ど

表8 育児不安因子における独立変数の推定値

独立変数	自由度	推定値	χ^2 値
助言ネットワーク	1	-0.09	6.40*
世話ネットワーク（自分の病気時）	1	-0.13	4.78*
世話ネットワーク（リフレッシュ時）	1	0.12	4.56*

注 * $p < 0.05$

表10 充実感欠如因子における独立変数の推定値

独立変数	自由度	推定値	χ^2 値
第3軸	1	-0.26	3.72†
子どもの数			
1人	1	-0.42	1.50
2人	1	-0.03	0.01
3人	1	0.01	0.00
4人以上	0	0.00	—

注 † $p < 0.1$

もの数については、先と同様、カテゴリー同士での比較において、有意差は認められなかった。

Ⅳ 考 察

「生活疲労」因子においては、世話ネットワーク（リフレッシュ時）が多いほど、母親の生活疲労は高いことが明らかとなった。育児のリフレッシュは、一般には育児不安や育児の疲労を軽減する働きを持つものと考えられるが、今回の結果は、そうした予測とは正反対の結果となった。この結果はむしろ、育児のリフレッシュが、母親の生活疲労を軽減しているというよりも、生活疲労の強い母親が、その生活から逃れようとして、何とかリフレッシュのネットワークを模索し構築していることの表れではないかと考えられる。生活疲労の軽減につながっていないのは、リフレッシュのネットワークは潜在的にあるものの、それが疲労を回復するほどまでに利用できていないことを意味するものと考えられる。また母親の収入が200～300万円未満の時に、生活疲労が大きいことが明らかとなった。この母親たちは、幼い子どもを抱えながらのフルタイム就労か、あるいはそれに近いパートタイムの母親であると考えられる。仕事場での時間的拘束も大きく、家庭生活へのしわ寄せも大きいのではないかと予測される。たとえ仕事をしていたとしても、家庭内での家事・育児を担っていかなければならないことには変わりはなく、肉体的な余裕を持たせるための各種サービスを利用するほどの経済的余裕もないのではないかと考えられた。

「育児不安」因子における助言ネットワークや世話ネットワーク（自分の病気時）が、育児不安を軽減するという知見については、これまで蓄積されてきた育児不安研究においても同様の知見が得られている⁸⁾¹⁰⁾。しかし、世話ネットワーク（リフレッシュ時）については、先の「生活疲労」因子と同様に、ネットワークが増えるほど、育児不安は高くなる傾向を示した。このことから、助言や自分の病気時の子の世話といった育児ネットワークと、リフレッシュの

ネットワークとは、質的に異なるものではないかと考察される。荒牧、田村⁹⁾は、道具的（本論では、実体的）サポートが増えることにより、育児不安が低く、育児肯定感が高くなる群と、育児不安が高くなる群に分かれていくことを示唆している。その背景として、提供者との人間関係や母親自身が望んでいるサポートとのズレなどにより、道具的サポートを受けることで、育児肯定感が低減し、育児不安が増幅するとの考察を行っている。つまり、たとえつらい育児からの解放時間としてリフレッシュの時間を持ったとしても、預け手と預かり手の間に、意思疎通や支持的な情緒的コミュニケーションが交わされていない限りにおいては、母親の育児不安は軽減しないばかりか、それが結局母親の育児不安を増幅させる可能性があり、単なるリフレッシュのためのネットワークでは、母親の情緒的安定を支えるサポートにはなり得ていないことを意味している。加えて、助言や子の世話（自分の病気時）といった育児ネットワークの担い手であっても、母親のリフレッシュのためのネットワークの担い手にはなりにくいことも予想されるところである。母親の内面においても、子どもを預けてまでリフレッシュをするという意識が強く、「子どもがかわいそう」という子どもへの罪悪感とでもいうような葛藤がわき起こるのではないかと考えられる。

「充実感欠如」因子については、母親の定位家族体験における第3軸祖父によるケア中心の養育⇔祖母によるケアとモデル的な養育において、有意傾向が認められた。祖父によるケア中心の養育を受けてきたと認知している時、母親の充実感欠如の得点が高く、祖母によるケアとモデル的な養育を受けたと認知している時、母親の充実感欠如の得点は低い傾向にあった。若原は、親への愛情（「この人と一緒にいると自然体でいられるだろう」など）や尊厳（「この人は、社会的に立派な人だと思う」など）の意識が高ければ、子どもは、その親をモデルとして受け入れていくことを明らかにした¹³⁾。本論では、若原のとらえる愛情とは「悩みを聞く」という養育役割に近似であろうし、尊厳は「見

習うべき存在」という養育役割に対応するものと考えられる。今回の分析では、親への愛情や尊厳ではなく、祖母に関するものとして有意傾向がみられた。このことは、幼少期における親の役割のみが重要なのではなく、親以外の存在との体験もまた、その後の子どもの人生において非常に重要な意味を持つことを示している。親以外の存在が子どもの養育に対して積極的に役割を担っていくことで、その子どもが、その後の人生においてどのように生きていくかを選択するモデルを多様化させ、いろいろな意味での柔軟性も備えていくのではないかと考えられる。その柔軟性が結果として、育児の充実感として現れていると推察された。また、祖父によるケア中心の養育では、充実感欠如の傾向が強くみられた。本調査における祖父母は、戦後の動乱期を乗り越えてきた世代であり、未だ家父長制や男女の性別役割分業の規範も根強く固持している世代ではないかと推察される。1952年の内閣府による世論調査では、「結婚した婦人が外に出て働くこと」に対して、「家事のことから」「家庭不和になるから」「育児のことから」という理由で、「反対する」ものが多くを占めていた。さらに夫や父親が、布団を敷く、掃除、洗濯、炊事などを「しない」という割合は非常に高く、男女の性別役割分業は、現在よりも非常に根強かったと思われる¹⁴⁾。さらに本調査の対象となった母親たちが幼少期を過ごしてきた1980年代においても、「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」という考えに対して、70%以上が賛成している¹⁵⁾。このような時代背景において、子どもの養育における祖父の役割は、祖母と比してあまり身近なものとして期待できるものではなかったのではないだろうか。祖父がケア役割を担っていたとはいえ、子どもにとってはそれほど親和的なものとして感じられなかったとも考えられよう。今回のデータ収集の方法では、その回数や頻度、親密さなどを知ることには限界があるものの、あまり身近に感じられない「祖父が中心となって」行われる養育は、子どもにとっては非常に親密性に乏しく、現実的に「頼れる」大人としての人生のモデル

には、なかなか得なかったものと思われる。

最後に、母親の「過去」である定位家族体験の認知と、「現在」ある育児ネットワークの関連について述べる。育児ネットワークが有効に働いていたのは、「育児不安」因子のみであり、「生活疲労」因子については、世話ネットワーク（リフレッシュ）が負の相関を示すのみであった。つまり単純に育児がわからない、疲れているということについては、母親の定位家族体験の認知が直接影響するものではなく、母親の「過去」というよりも、「現在」置かれている環境の方が、大きな影響を及ぼすものと考えられた。しかし「充実感欠如」因子においては、育児ネットワークが有効な支援策として機能しておらず、むしろ母親の定位家族体験の認知に影響されていることが明らかとなった。「充実感」とは、「自立・自信」「連帯（誰も私を相手にしてくれないような気がする（逆転項目））」、「信頼」など、自分の人生に関する意味感と、人生への肯定感を示すものであるとされている¹⁶⁾。今回の育児不安項目の因子分析では特に、「連帯」に通じる項目が、充実感欠如の項目として負荷量が高い。幼少期に父母に限らず誰かと濃密につながっていたかどうかという感覚が、その後の人生においてもずっと引き継がれ、自分が育児をする段階になっても、どこかしら「どうせ誰も助けてはくれない」という不安定な感覚を持ち続けることになるとも考えられる。人間の情緒は総合的なものであり、育児における充実感が欠如すると、生活全体の情緒も不安定になろう。幼少期の体験に引きずられず、育児中の充実感に寄与するようなサポートシステムが望まれるところである。

V 今後の課題

今後の課題として、第1にジェンダーの視点があげられる。今回の分析は母親に焦点を当てており、その時点で「女は子育て」の意識を再生産する恐れがある。今後は父親の定位家族体験や父親の育児のありようについても検討する必要がある。第2に母親の定位家族体験の「認

知」を取り上げた点である。「認知」は、その人の回顧に頼るものであり、客観的にどうであったかを測るものではない。またその後の教育や環境、人々の支え等で変化する可能性を持つ。分析の尺度として非常にあいまいな面を残すものであることを考慮しなければならない。また対応分析における累積割合が27.0%と低いことも課題として残った。第3軸においては、祖父と祖母による養育の違いによる影響が示唆されたが、今後は祖父母による養育のなかった対象者を除外して検討を深める必要もある。また、リフレッシュのためのネットワークの定義について「リフレッシュに出かけるため」と限定していることも、分析に影響を与えている可能性がある。今後は、むしろ子どもから離れて自由になる時間について検討を加えていくことが必要ではないかと考える。さらに今回は、幼少期における人とのかかわりの範囲を定位家族に限定したが、今後は範囲をより広げ、保育士や地域の人等、定位家族に限定されない関係をも視野に入れていくことが求められる。最後に、今回の分析では「何が育児ネットワークを促進させるのか」については言及できなかった。分析においては、育児不安得点の因子を構成する項目数が少なく、不十分な面は否めない。あわせて今後の課題としたい。

なお、本研究は平成15～16年度に文部科学省科学研究費補助金の助成を受け実施したものである。本論文の作成にあたり、ご指導・ご教授くださいました愛知学院大学千野直仁教授に、心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 佐々木保行, 佐々木宏子, 中村悦子. 乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労. 宇都宮大学教育学部紀要 1979; (29): 21-42.
- 2) 清水淑子. 3カ月児を持つ母親の育児不安について. 小児保健研究 1980; 38(6): 493-9.
- 3) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安. 家庭教育研究所紀要 1982; (3): 34-56.
- 4) 川崎裕美, 海原康孝, 小坂忍, 他. 母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討. 小児保健研究 2004; 63(6): 667-73.
- 5) 小木曾加奈子. 母親の被養育体験と現在の育児負担感との関連性. 小児保健研究 2007; 66(5): 688-94.
- 6) Mona McCullough and Avraham Scherman. Family-of-origin interaction and adolescent mothers' potential for child abuse. FAMILY THERAPY 2004; 31(3): 145-53.
- 7) 山根真理, 松田智子, 斧出節子, 他. 保育園児をもつ母親の育児問題—育児不安を中心にして—. 総合社会福祉研究 1990; (2): 110-21.
- 8) 芳賀道. 母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について. 中央大学大学院研究年報 2001; (30): 211-8.
- 9) 荒牧美佐子, 田村毅. 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因—幼稚園児を持つ母親の場合—. 東京学芸大学紀要第6部門2003; 55: 83-93.
- 10) 藤田大輔, 金岡緑. 乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響. 日本公衆衛生誌 2002; 49(4): 305-13.
- 11) 冬木春子, 本村汎. 青年期における子どもが認知した父親役割構造の研究. 家族関係学 1996; (15): 45-55.
- 12) 中谷奈津子. 子どもの遊び場と母親の育児不安. 保育学研究 2006; 44(1): 50-62.
- 13) 若原まどか. 青年が認識する親への愛情や尊厳と、同一視及び充実感との関連. 発達心理学研究 2003; 14(1): 39-50.
- 14) 内閣府. 婦人と青少年に関する世論調査. 1952.
- 15) 井上輝子, 江原由美子編. 女性のデータブック (第4版). 有斐閣, 2005; 141.
- 16) 大野久, 茂垣(若原)まどか, 三好昭子, 他. MIMIC モデルによるアイデンティティの実態としての充実感の構造の検討. 教育心理学研究 2004; 52: 320-30.